



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

## 対照文法研究の系譜

著者	石黒 昭博
雑誌名	同志社大学英語英文学研究
号	54-55
ページ	179-202
発行年	1991-11
権利	同志社大学人文学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000001688">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000001688</a>

# 対照文法研究の系譜<sup>1</sup>

石 黒 昭 博

## I

1969年にケンブリッジ大学で開催された The Second International Conference of Applied Linguistics で発表された報告のうち対照研究を扱ったものが、Gerhard Nickel の手で編集され、*Papers in Contrastive Linguistics* と題されて発行されたのは1971年のことであった。

以前に contrastive study ということばはあっても、Contrastive Linguistics と堂々と銘うった書籍は筆者の知る限りでは見つからない。編者 Nickel はここで対照言語学の応用言語学の一分野からの自立を唱っていると読むのは早計だろうか。本書発行から20年が経過したが、今日の対照言語学の隆盛を見たらこのようにしか思えない。

本書の扉のことばには次のようにある。

Contrastive linguistics, as its name suggests, is concerned with the contrasts and similarities between languages and the extent to which these contrasts can help in the study of linguistics and the construction of language teaching courses. The papers in this volume examine this practical application and also areas of theoretical importance where the influence of contrastive linguistics on language typology, general linguistic studies and the study of linguistic universals is apparent.<sup>2</sup>

ここで明らかに編者の編集上の意図が読み取れるが、対照研究を応用言語学の世界から理論言語学の世界へと連れ出す目論見がみられる。本書を一読

してまず感じたことは、編者の個人的好みや主義もあろうが、ほとんどの論文がいわゆる理論言語学的アプローチによって書かれていることである。それまで、対照研究というと、第2言語習得のための言語教育理論を扱ったものが大半で、とかく理論言語学、即ち俗に言う「純言語学 (pure linguistics)」の分野から離れていて、また言語教育学からも疎んじられるという異端児的なものと考えられていたが、Nickel のこの論文集の刊行以後、学界の態度は一変したと言えよう。さらに言語普遍論 (language universal theory) の立場からの強力な支持が、丁度この頃から明らかになったことも加わって、生成変形理論による対照研究も現れ始めた。

プラグ学派等光栄ある伝統をもつ東ヨーロッパは、この対照研究においても実に目覚ましい成果をあげていることが上記の論文集からうかがえるが、これも対照研究の発展に拍車をかけた。

現在では対照言語学は比較言語学と同じく言語学の代表的部門のひとつで、学界でも万人が認め、奨励される研究方法である。内外の有名言語学者も Japanese vs. English, English vs. Chinese, Hungarian vs. English などの分野で多くの著書、論文を発表している。<sup>3</sup>

本稿は対照研究のうち、特に対照文法研究に焦点を向けて、その背後にひそむ言語理論の諸相を探り、この研究分野の歴史的発展ないし、展開の跡をたどったものである。やや特異な展開を見せたわが国の場合にどうしても関心が向くが、ヨーロッパ、アメリカ、特に東ヨーロッパの資料も参照した。これによってヨーロッパにおける外国語教育、主として英語教育の成功の影には、このような対照研究の隆盛とその程度の高さが大に関係しているにちがいないということが明らかになる。

## II

複数の異なった言語を並べてその異同を調べる学問分野には「比較言語学」と「対照言語学」の二つがあり、前者は語族を同じくする言語（例えば、英

語とドイツ語)を比べ、後者は語族の異なった言語(例えば、日本語と英語)を比べる言語学の方を指すことは衆知の事実である。しかし、比較言語学が18世紀に誕生して以来の永い歴史を持つものであるのに比して、対照言語学の方は、いつどのように始められたのか定かではない。比較言語学を表す英語名 Comparative Linguistics (または Comparative Philology) が古くから用いられているのに対して、対照言語学の英語名である Contrastive Linguistics は新しい用語であり、第二次世界大戦前の辞書には見当たらない。筆者の知る限りでは、梶田秀郎・大野芳太郎両氏の著書『比較対照 日英文法綱要』(後記文献24)がわが国における最古の体系的に日本語と英語の文法を比べた文献かと思うが、この古典的名著の中にも contrastive という語は一回も顔を出さない。

いわゆる正統的な理論言語学者はとかくこの対照言語学的な研究を軽視し、構造主義理論や生成理論が確立されてからも、言語学研究の片隅に置かれていた感が強かった。この最大の原因は対照研究の方法論が確立していなかったからで、方法論がないままに多くの本が書かれ、その中には今日的視点からしても瞠目すべきものもある。なるほど、中には英語教師のふとした思いつきのものもあり、純理論に比して、実践的研究や提案がとかく軽んじられるわが国の教育界の風潮の元では止むをえない面も種々あったと思われる。しかし、この10年来の言語学の成果のひとつとして、対照言語学、特に対照文法の研究の理論が Nickel (後記文献27)、Fisiak (後記文献4, 5, 6)らの編んだ論文集や、東欧に於ける高い関心に跡付けられているように、またわが国における質の高い研究書(例えば、後記文献19, 22)の刊行や、アメリカで活躍する黒田成幸、久野 暲、牧野成一らの深い豊かな興味とその研究の結実(後記文献19, 20)が理論言語学者、言語教育者双方の注目と支持を集めていることなどから見て、心強いものがある。

本稿はわが国における日英両語の対照文法の研究の変遷を素描し、その中で相対論と普遍論がいかに関わってきたかを論ずることを目的としている。

## Ⅲ

日本語と英語という全く異なった二つの言語をなぜ比べるのかと問われたら、答えは大きく二つに分かれるだろう。

理論言語学者は、

1. language universal (言語の普遍性)を見つけるため
2. linguistic typology (言語類型論) 確立のための資料の発見のため

と答えるだろうし、一方語学教育者は、

1. 日英両語の文法の異同点を見つけ、比較しながら効果的に教えるため
2. 文法教材を作成する上での資料を得るため

と答えるだろう。

前者は生成理論の目標のひとつである普遍性の発見を前面に打ち出し、後者はもっと実践的な「役に立つ英語」の教育の手がかりを見つけることを目標とするというようになかなりの違いが見られるようだが、これは全く表面上のことであり、両者がそれぞれの発見を参照したら、より速く、より立派なものが生まれるにちがいない。両者は変なこだわりを捨てて、手を握って進むべきである。

前者のグループの中にも、いわゆる「普遍論者」と「類型論者」の間には、かなりの主張の相違がある。これは後で論ずる。

## Ⅳ

この項では、言語における相対性と普遍性をめぐる問題を考えてみよう。簡単に述べると両者は次のようになる。

相対性 (relativity): Every language is different.

普遍性 (universality): Every language resembles each other.

この問題を論じるためには、相対論では「違うならどこがどう違うのか」、普遍論では「似ているならどこがどう似ているのか」を明らかにしなければ

ならない。共通性や類似性については、もし存在するという立場に立てばそれは普遍論支持ということになり、また、そんなものは存在しないという立場に立てば相対論支持となるというように簡単には割り切れないのがこの問題であり、これは共通性や類似性というのは程度の問題であるからであり、結論は得難い。この結論を出すことが、言語研究の目的であるはずがない。なんとなれば、双方が真理であるからである。

世界に存在する約 3,500 の言語はそれぞれ皆異なるといえば異なるのである。例えば、同じものの呼び名が異なること、有性言語では性 (gender) が同族言語の間でも異なること、格 (case) の用い方が言語間で異なること、<sup>4</sup> 文法 (例えば語順) の異なること、等々あげればきりがない程である。

またすべての言語に共通性、類似性があると言えばあると言える。例えば、人間の基本的論理、各文化のもつ倫理観、認識の方法にはかなりの共通性が見られるし、また、各言語の深層構造上の類似性、すべての表層構造が変形を経て深層構造より得られるという生成文法の仮説の妥当性も言語の普遍主義を支持する根拠である。

さらに上記の語順の異同の問題にしても、

英 語 : S+V+O

日 本 語 : S+O+V

と決めつけることはおかしいし、この形式を西欧語、東洋語の基本的類型と考えるのにも無理がある。歴史的に言っても、次の語順が標準的であった。

ラテン語 : S+O+V

古期英語 : S+O+V (10世紀までの英語)

中 国 語 : S+V+O

(その他、東洋語には S+V+O, S+O+V 両様の言語が多数ある。)

上のように「異」を強調すると、同一の類型を持つ言語には同じ特徴 (features) が見られるという「同」の面もある。例えば、日本語のような後置詞言語に見られる語順の自由性、その逆に前置詞言語に見られる語順の定

着性があげられよう。

次に、欧米における文法の普遍性、相対性の考え方を瞥見してみる。普遍文法の考え方の起源は遠くローマ帝国の出現に遡る。当時、ヨーロッパの言語といえばラテン語であり、政治、学芸の全面に涉って、「ラテン語を知らざれば人にあらず」というような風潮が実在した。キリスト教社会の成立と共にその掲げる人間平等主義はラテン語の普及に拍車をかけ、宗教、学問、教育、芸術の各方面は言うまでもなく、特にこれらの礎石となった思弁哲学は思弁文法の論理に基づいたもので、ラテン語は世界語 (Lingua Franca) として最高の普遍言語の位置を占め、体系的言語として全ヨーロッパを席捲した。

ローマの直接支配が衰えた後も、ラテン語はヨーロッパの普遍言語として存在し続け、ポール・ロワイヤル (Port Royal) の修道僧アルノー (Arnaut) とランスロ (Lancelot) らが世俗言語の、フランス語にもラテン語と同等の論理構成力のあることを証明したのは17世紀になってからであった。これはラテン語の娘言語たるロマンス諸語の間にも共通した一般性の存在することを証する第一歩となり、ルネッサンスと啓蒙期における知識の発展と蓄積の原動力となった。

17世紀に始まる中産階級の台頭による学校教育の普及の中で最も必要とされたのは自国語の文法書の完成であり、英国ではラテン語文法をモデルにした文法書が生まれ、その中では規範主義 (Prescriptivism) が重要視され、普遍文法の流れは生き続けた。18世紀には経験主義 (Empiricism) が生まれ、これはラテン語文化のもつ伝統主義に反旗を翻し、文法の規範主義もようやく批判を浴び始める。世は実証主義重視の時代へと突入する。普遍主義の礎石はようやくゆるぎ始めたのである。

このような状況の中で、19世紀になると構造主義 (Structuralism) が誕生する。これは従来の経験主義、実証主義全盛の風潮の中でも、余りに、思弁的、非科学的として批判されかけていた伝統主義を過激に攻撃するに至る。

言語学の世界ではソシュール (F. de Saussure) の説がこれに当たると言えよう。旧構造主義と呼ばれるこの経験主義的実証主義の黄金時代は20世紀に入っても続き、言語学界ではアメリカの構造主義言語学がこれを代表する。アメリカ構造主義では、言語間の相違点を強調し、極めて急進的に共通性、普遍性を目指す資料発見の態度を批判し、「違うこと、つまりそれぞれの言語に特徴のあることこそ尊い」という立場を固守した。資料の収集は、違いの実証のために行なわれ、その分析は帰納的に相対性を証明するためのものであった。

20世紀後半、旧構造主義の命運ようやく尽き、世はチョムスキー (Chomsky) らの唱える新構造主義とも言える生成言語学 (Generative Linguistics) の時代へと入る。生成理論では経験主義的な資料収集中心のアプローチを排斥し、方法論としては16, 17世紀的な普遍論を擁護し、これを再評価するとともに、旧構造主義の帰納論を捨て、演繹論的立場をとった。つまり、人間のもつ認識能力の普遍性、人間のもつ先天的言語能力の普遍性を強調し、独特の言語モデルの完成を目指した。これが生成変形 (文法) 理論 (Generative Transformational Theory) である。ここで普遍論は初めて最強有力な理論的援助のもとで種々の新しい展開を見せることになる。対照研究も生成理論のもとで大きな飛躍を遂げる。

## V

この項では、文法理論に於ける相対と普遍を文法理論の歴史にそって類別的にたどってみる。わかり易いように表で示す。

文法の種類	代表的文法家及びその考え方		類別 [U: 普遍] [R: 相対]
1. ラテン語	D. Thrax	Lingua Franca	U



2. 規範文法	J. Murray J. Priestley	ラテンモデルの 規範主義	U
3. 伝統文法	O. Jespersen C. O. Curme	方法は経験的, 帰納的	U
4. 科学文法	Henry Sweet	実証主義, 帰納的	R
5. 構造主義文法	L. Bloomfield E. Sapir C. C. Fries	客観主義, 資料重視	R
6. 生成文法	N. Chomsky C. J. Fillmore	理知論に基づく 生成理論	U

「伝統文法」をUとし、Jespersen の名をあげたのは彼の *The Philosophy of Grammar* (後記文献12) は強く普遍主義的態度を示しているからであり、普遍主義と経験主義・帰納論とは必ずしも矛盾しない。また「構造主義文法」で Sapir をあげたが、彼の言語観はかなり心理主義的で、当時の資料重視一辺倒の経験主義とは一線を画するもので、この故にある部分で生成文法家たちにも評価されている。<sup>5</sup> 「生成文法」は大まかに言って二種の普遍論に基づいている。第一のグループは Chomsky, Fillmore らを中心にした理論重視派であり、第二のグループは Greenberg, Comrie, Hawkins<sup>6</sup> らの資料重視派ないし、類型論者たちである。この二派の主張の相違点は次の4つである。

1. 研究対象とする言語の数：

第一のグループはこれが一つでもよいとするのに対して、第二のグループは多ければ多いほどよいとする。

2. 普遍性の種類：

第一グループは統計や合意性を持った普遍性は認めず、常に絶対的普遍性のみを重視する。第二グループは前者が否定するものを重視して相対的普遍性を認める。

## 3. 普遍性の具体度：

第一グループは深層構造の存在は各言語に共通であり、生得的能力つまり内在的な言語能力や言語知識を最重視する。一方、第二のグループは各言語のもつ機能、外的構造（修飾、語順、etc.）などの具体的な普遍性を第一に考える。

## 4. 目的：

第一のグループは言語習得の生得的な面の解明を目的とし、第二のグループは言語の統計的な特性を算出することを目的とする。しかし双方共に「言語とは何か」を解明する方向に向うが、第一のグループは「人間とは何か」を解明することも目指す。

以上述べた二つのグループは共に生成理論をその分析の根幹に置いているが、第一グループが絶対的普遍性のみを重視するのに対し、第二のグループは一般的普遍性も認める立場をとってきた。しかし最近では両者の接近の傾向がうかがわれる。例えば、Chomsky は初期理論を修正して、資料の重要性に着目して、その理論展開の中を拡げているし、第二のグループの代表者ともいうべき Hawkins は Chomsky の X-bar 理論を自らの分析に導入している（後記文献7）。また、Vennemann はその唱える「範疇文法理論 (Categorical Grammar)」で折衷論を展開している（後記文献33）。つまり、両者に大きな決定的相違点は無いと言っていいたいだろう。

## VI

次に対照研究の実際について、日本と諸外国の方法と実例を紹介し、それらについて若干述べることにする。便宜上、文法理論の歴史に応じて三つのグループに分けて論ずる。

## 1. 伝統文法

わが国最初の本格的な日英対照文法を扱った著作は、榊田秀郎、大野芳太郎共著の『比較対照日英文法綱要』（後記文献24）であろう。本書は冒頭の

前書きに見られるように、「英語教育上の効果を高め、国文法と英文法を結ぶ」という実践的目標にそって著わされている。内容は当時の文法教育理論に基づいた極めて思弁的なものであるが、音韻篇、単語篇、文章篇の三部より成り、特に文章篇は語順論を中心にしたものである。例えば対照は次の実例のように示される。(ただしかなづかいは新かなづかいに直してある。)

英語に於いては文の性質（平叙文・疑問文・感嘆文・命令文）によって其の Word Order を異にするが、国語に於いてかかる事はない。此の点、国語の体系は非常に簡単であるに反し、英語は甚だ複雑であって、従って英語では Word Order を知ることが甚だ重要となる。下表は平叙文に於ける対照である。

(1)	英	Subject	+	Predicate				
		I		run.				
	日	主語	+	述語				
		私は		走る				
(2)	英	Subject	+	Predicate	+	Object		
		You		like		it.		
	日	主語	+	補語	+	述語		
		貴君は		それを		好む		
(3)	英	Subject	+	Predicate	+	IndirectObj	+	DirectObj
		I		gave		him		a book.
	日	主語	+	補語	+	補語	+	述語
		私は		彼に		本を		与えた
(4)	英	Subject	+	Predicate	+	Complement		
		He		is		a great man.		
	日	主語	+	補語	+	述語		
		彼は		偉人		なり		
(5)	英	Subject	+	Predicate	+	Object	+	Complement
		I		made		him		a teacher.
	日	主語	+	補語	+	補語	+	述語
		私は		彼を		先生に		した

『比較対照日英文法綱要』 pp. 279-280.

2. 感情を表わす動詞の多くは、passive form を使って自動の働きを示す。  
次に passive form が自動の働きを示しているわけではないが表現上、自動的な意味を表わす結果となっているような場合がある。そういう例を示してみると、
- |  |                              |
|--|------------------------------|
| The work <i>was attended</i> with much difficulty.             | その仕事には多くの困難が <u>伴</u> った。    |
| An operation <i>is accompanied</i> with some pain.             | 手術にはある苦痛が <u>伴</u> う。        |
| The loan <i>was covered</i> many times over by subscription.   | その公債は数倍にのぼる <u>応募</u> 者があった。 |
| They <i>are fixed</i> in a new home.                           | 彼等は新しい家に <u>着</u> 着いた。       |
| His misgivings <i>were justified</i> .                         | 彼の疑惑は本当になった。                 |
| He <i>is well informed</i> about the matter.                   | 彼はその事柄をよく <u>知</u> っている。     |
| This wine <i>is loaded</i> .                                   | この酒には混ぜ物がある。                 |
| They <i>are equally matched</i> in their knowledge of English. | 彼等は英語の知識が <u>匹敵</u> している。    |
| All fear <i>was merged</i> in curiosity.                       | 好奇心に <u>駆</u> られて全くこわさを忘れた。  |
| Your silence will <i>be read</i> as consent.                   | だまっていると、賛成の意に <u>解</u> せられる。 |
| All bodies <i>are made up</i> of atoms.                        | あらゆる物体は原子から <u>出来</u> ている。   |

等、これらの例文に見られるように、英文では passive form が使われているが、日本文では active form の表現がなされている。つまり、このような場合の passive form は思想表現上の一つの手段として使われていると考えることが出来る。そして、日本文のいいまわしと、英文の言いまわしには、このような相違もあると考えられる。英語の passive form は必ずしも日本語の active form にならないし、また英語の active form が必ずしも日本語の active form に匹敵するわけではないのである。

この他にも松下大三郎、大槻文彦、山田孝雄らによる国文法の諸著作（後記文献25, 29, 34）にも部分的な日英語の比較が行なわれている。時代はずっと下がるが、空西哲郎の『日本語と英語』（後記文献31）も入門的概説書であるが、伝統文法的な思考と方法によるものである。その他、喜多史郎のもの（後記文献13）も伝統文法的な意味の考え方に基づいた学習書である。

## 2. 構造主義文法

構造主義は英語教育に寄与した面が多大であったことは論をまたない。従って、数多くの英語習得のための対照文法の教材、理論書が生まれた。まずシカゴ大学出版局から出版された英一独、英一仏、英一西、英一伊の対照研究の叢書 *Chicago Series* が昭和30年代に数多く現われ、わが国のこの方面の関係者に多くの示唆を与えた。あげればきりがないが、Robert Lado の *Linguistics across Cultures*（後記文献21）は対照研究の目的を単に言語間の比較研究にとどまらず、諸々の文化現象の比較に迄至るべきであると、その方法と意義を論じた好著で、わが国の文法教育者に大きな影響を与えた。また、日英語対照研究の実践の記録として、Everett Kleinjans の博士論文 “A Descriptive-Comparative Study Predicting Interference for Japanese in Learning English Noun-Head Modification Patterns”（後記文献14）も翻訳出版され、数多くの読者の関心を集めた。巻下吉夫の『日本語から見た英語表現』（後記文献23）もやや時代を後にするがその分析方法は構造主義的、ないし経験的である。

このグループに属する著作はすべて、日英両語の表層に現われた現象のみを取り扱い、言語構造の根底に横たわるものを無視している故に生成文法に携わる人たちからは高く評価されてはいない。しかし、英語教育という面から見ると教室での活用には便利で、有効な資料を提供してくれる。次に今述べた著作の実例をあげてみる。

3.1232 PASSIVE CLAUSES WITH DATIVE OBJECT

There is a further peculiarity of English passives which tends to cause difficulties when our students try to put it into German. We may consider all English passives as transforms of constructions not involving modification IV ("actives").

The war was won by the Allies—the Allies won the war

[But] He was given a book —a book gave him

—a book was given to him

—( ) gave him a book

In German the passive transforms of clauses involving verbs with a dative object retain this dative form in contrast to English:

man sagte ihm... — ihm wurde gesagt .

they told him — he was told

Unless we drill this pattern, the student will construct sentences like

\*er wurde ein Buch gegeben

which are incomprehensible to a German

*The Grammatical Structures of English and German*, pp. 35–36.

*English* A A N

big red book

little old woman

*Japanese* A A N

*ookii akai hon*

big red book

*akai ookii hon*

red big book

*ookikute akai hon*

big (and) red book

*akakute ookii hon*

red (and) big book

*Form:*

*English.* Two adjectives before the noun both modifying it.

*Japanese.* Two adjectives before the noun both modifying it.

*Meaning:*

*English.* Quality of substance.

*Japanese.* Quality of substance. The *-te* form levels the two adjectives (the *and* in the gloss).

"A Descriptive-Comparative Study of English and Japanese Basic Statement Patterns," p. 241.

日本語	簡略化の段階	英語
島から出てきた娘 ( $N_a$ -助詞- $\alpha$ - $N_b$ )	1	the girls who come from the island ( $N_b$ - $\alpha$ -prep- $N_a$ )
↓ 島からの娘 ( $N_a$ -助詞-の- $N_b$ )	2	↓ the girls from the island ( $N_b$ -prep- $N_a$ )
↓ 島の娘 ( $N_a$ の $N_b$ )	3	↓ the island girls or the girls of the island ( $N_a$ - $N_b$ ) ( $N_b$ -of- $N_a$ )
↓ 島娘 ( $N_a$ - $N_b$ )	4	

『日本語から見た英語表現』 p. 198.

### 3. 生成理論文法

生成理論の創始者で、30有余年を経てもなおその地位を守る Noam Chomsky の代表的著作の中には対照研究について論じたものは見当たらない。彼はスピーカーとして招かれたいくつかの学会の講演の中で、彼の唱えるいわゆる「変形文法」は言語教育とはなんの関係もないことを繰り返し主張しているが、<sup>7</sup> 各国の文法家の中には Chomsky が用いる英語の記述と自国語の構造を比べているうちに、ひとり対照研究的な立場に置かれた人たちが多くいる。井上和子、久野暉、牧野成一らがわが国からのこのグループに属するし、諸外国にも多く見受けられる。

特に、Charles J. Fillmore の生成理論である 格文法 (Case Grammar) は世界各国の学者たちの関心を引き、この理論を活用した対照研究は盛んである。<sup>8</sup>

これらの人たちの形成するグループはヨーロッパ、特に東欧に多く独自の研究成果が続々と発表されている。一例をあげれば、T.P. Krzeszowski はその *Contrastive Generative Grammar* で変形理論によるポーランド語と英語の対照研究の方法を示しているし(後記文献 16)、E.H. Stephannides らによるハンガリー語のグループも重要な業績をあげている(後記文献 32)。J.F. Fisiak 編の *Theoretical Issues in Contrastive Linguistics* や *Contrastive*

*Linguistics* (後記文献4, 5) は数十篇の対照研究の論文を集めている。これらの特徴は生成変形理論, 格文法, 言語心理学, 社会言語学における最近の研究成果を踏まえて各著者の自国語と外国語(主として英語)の対照研究をとりあげていることで, その扱う範囲は極めて広大である。

対照文法理論では, 表層の構造は問題にせず, 深層の構造の比較に主力を注いでいることが最大の特徴である。次にその実例をいくつかあげる。

(1) Seymour sliced the salami with a knife

(2) Seymour used a knife to slice the salami

even though he is, as yet, unable to state what the deep structure of these constructions is, in terms of explicit rules.

Before we continue with our task, we shall make a preliminary step, trying to examine the syntactic behaviour of Polish equivalents of (1) and (2) to see whether the constructions which they represent are subject to a parallel set of co-occurrence restrictions. In this way we shall try to make sure that our initial hypothesis is not invalidated at the very outset.

Polish equivalents of (1) and (2) are:

(3) Seymour pokrajał salami nożem.

(4) Seymour użył noża aby pokrajać salami.

In (3) the instrumental inflection with 'nożem' appears as a true equivalent of the preposition 'with' in (1) since the former, like the latter, has the purposive, instrumental sense (Lakoff 1968). Also in (4) the verb 'użyć' is a true equivalent of 'use' in (2) as both appear in the instrumental sense.

Let us represent the surface structures of the two pairs of sentences as:

(5) NP<sub>1</sub>-V-NP<sub>2</sub>-with-NP<sub>3</sub>

(6) NP<sub>1</sub>-use-NP<sub>3</sub>-to-V-NP<sub>2</sub>

(7) NP<sub>1</sub>-V-NP<sub>2</sub>-inst-NP<sub>3</sub>

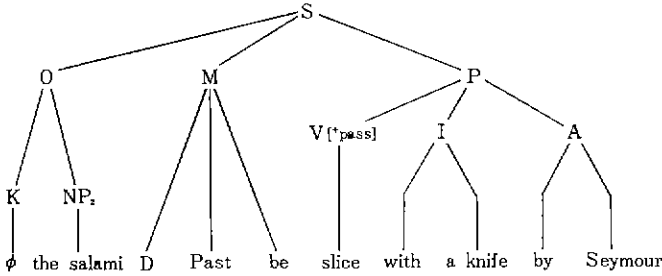
(8) NP<sub>1</sub>-użyć NP<sub>2</sub>-aby-V-NP<sub>3</sub>

where 'inst' in (7) stands for the instrumental inflection.

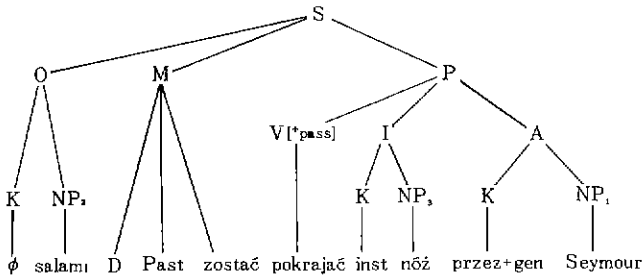
*"Equivalence, Congruence and Deep Structure,"* p. 39.



(36)



(37)

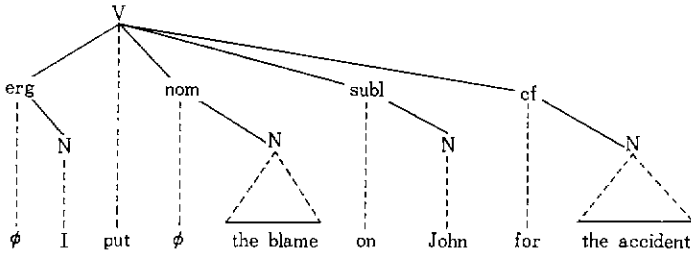


“Equivalence, Congruence and Deep Structure,” p. 46.

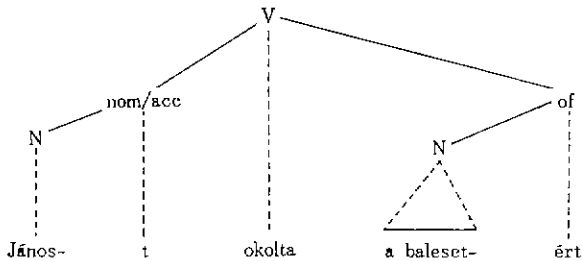
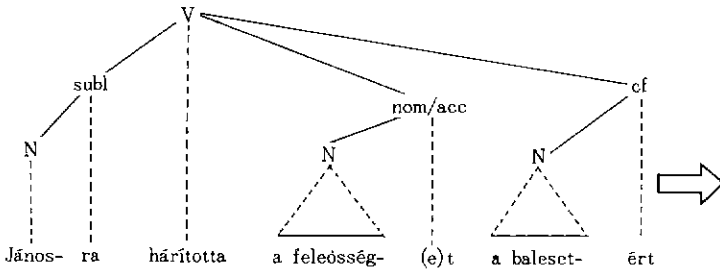
*Survey of the contrasts of Overt Inanimate By-Agents and Janus-Agents*

English Overt Inanimate <i>By</i> -Agents	Hungarian
$N_2P(DO) + V_{pass} + by\ N_1P$	$N_2P(DO_{Acc.}) + V_{active}(transitive) + N_1P(SNom.)$ $N_2P(SNom.) + V_{active}(causative)$ $N_2P(DO_{Acc.}) + N_1P(adv. inst.) + V_{act.}(3/pl.)$
$N_2P(DO) + V_{pass} + by\ N_1P$ +that+S clause	$N_2P(DO) + V_{act.} + dem. pronoun (Acc.) + that\ S\ clause$ $N_2P(DO) + V_{act.} + dem. pronoun (Nom.) + N + S\ clause$
<i>English Janus-agents</i> $N_2P(DO) + V_{pass} + by/with\ N_1P$	$N_2P(DO_{Acc.}) + N_1P(SNom.) + V_{active}$ $N_2P(DO_{Acc.}) + N_1P(adv. instrumental) + V_{act.}(3/pl.)$
$N_2P(DO) + V_{pass} +$ <i>to/other prepositions</i> + $N_1P$	$N_2P(SNom.) + V_{act.} + N_2P(DO_{Acc.})$ $N_2P(SNom.) + V_{act.}(intrans. suffix) + N_1P(gen. adverb)$
$N_2P(S) + V_{pass} +$ <i>by (means of)</i> $N_1P$	$N_2P(DO_{Acc.}) + N_1P(adv. inst.) + V_{act.}(3/ or 1/pl.)$ $N_2P(DO_{Acc.}) + N_1P + postposition + V_{active}$

*Contrasting English with Hungarian, p. 67.*



The diagram of the corresponding Hungarian construction is as follows:



*Contrastive Studies Hungarian-English* p. 68.

## VII

最近の日英語対照研究は、生成理論に基づいたものが主流を占めているが、純粋に理論的なものと英語教育への応用を目指したものの両者に分かれている。

S-Y. Kuroda (黒田成幸)は *Japanese Syntax* に所収された論文 “Whether

We Agree or Not: A comparative Syntax of English and Japanese” (後記文献20)において、Chomsky の統率・束縛理論に基づいた日英対照文法研究の方法を示した。これは極めて形式的、かつ記号的で、例えば次のような構造式で「象は鼻が長い」という日本文を記述する。

$$[{}_{\max(I)} \text{Max}(X) [{}_{\max(I)} \text{Max}(Y) [I' \text{Max}(V) \text{INFL}]]]$$

黒田は極めて用心深い文法学者であるが、今回も久野がその機能主義理論の中で提案したことを GB 理論で証明するという形をとって自らの説を提起している。つまり、彼は配列形式の比較、生成過程の比較を行い、言語普遍論へのひとつの寄与という形で自らの形式主義を展開しているのである。

『日英比較講座 全五巻』は、音声と形態、文法、意味と語彙、発想と表現、文化と社会という五つのタイトルをかかげ、日英語対照研究の方法、実践、成果の全貌を紹介しようという試みであるが、各著者の言語理論が伝統的、構造主義的、生成論、機能主義的と一様ではなく、視野の不統一、方法の一貫性の欠如が見られるのが欠点である。また、水谷信子の『日英比較 話しことばの文法』(後記文献26)は慣用 (usage) の比較が主体で、日英語の違いを強調するか、誤用の分析 (error analysis) に注意が向けられ過ぎていて、言語学的研究の書としてはもの足りない。

## VIII

この項では、対照研究の根本的な問題である「何を比較すれば良いのか」という問題をとりあげ本稿の結びとしたい。

Robert Lado は比較の対象となるのは、二つの言語の音組織、語組織、文組織、意味組織などの言語構造の相違点、及び異文化間の諸現象であると述べ、その上に「同等のもの (equivalents)」同志を比べ、その異同を調べるのも可としている。私は以前に発表した論文で、比較対照研究における「同等のもの」とは何か、何をもちて equivalents と考えるのかという問題

を論じた（後記文献10）。現在、私は次のような equivalents が存在すると考えている。

- 1) 形式上のもの
- 2) 意味上のもの
- 3) 類型的なもの
- 4) 思考方法上のもの
- 5) 現象上のもの（機能上のもの）
- 6) 文化的なもの

しかし、これらは Lado が主張するような相対的な枠組みの中で論じられても語学教育上益するところは少ないと思われる。Lado の論説の中には明白に普遍論的立場を否定するものがあり、特に文化現象の比較についてはいかなる方法論も提示されていない。言い換えれば、帰納法的、経験主義的な思考に基づいた理論の弱さがここに露呈されているのである。

今後の最も有望で有効な方法、ないし実践は演繹論的なものでなければならず、これを具体的に言うならば、生成理論的なもので、異言語間における変形規則の比較、変形過程の比較、両言語のもつ論理的、記号学的比較などがあげられよう。

最近の比較文化論の重要性の主張に乗じて、方法論を無視した提言や実践が行なわれていて、これは生成理論を認めない立場の人たちに大いに歓迎されているところであるが、常に言語を文化の発想現象としてのみ観察し、分析することは '60年代前の風潮へと逆行することであり、これには十分注意が肝要である。

比較対照研究の方法は言語理論の変遷に振り回された感もあり、新しいものが常に最高であるとは限らないのは当然である。Chomsky の形式主義には限界があり、最近では科学的（客観的）分析を越えた人間の認知構造の普遍性の存在を問題とした普遍理論が浮上してきた。言語の持つ外面的な形式の多様性は自明のことであり、それよりその深奥に存在する言語構造の普遍

性を発見し、解明することが言語学者の使命であり、語学教育学者もこの立場を寛大に認識して、大いに力を貸すべきである。

### 注

- 1 本稿は1990年5月27日に同志社大学に於いて開催された日本英語教育学会での講演を骨子とし、それに補筆、修正を加えたものである。なお、本講演の縮約版は、「相対と普遍—対照言語学の方法をめぐる—」と題して『英語教育研究第10号』（日本英語教育学会編、1991年4月）に発表されているが、紙面の都合で参考資料をすべて剽窃しなければならず、筆者の意図が十分に伝わらない面も慮られたので、大幅に改編し、資料を加えて本誌に発表する次第である。
- 2 G. Nickel, (ed.) *Papers in Contrastive Linguistics* (London: Cambridge University press, 1971) 表紙カバーの紹介文より。
- 3 後述の黒田成幸、久野 暉らの日本語対英語、Sandra Anner Thompson の英語対中国語、E.H. Stephannides のハンガリー語対英語のものなどがある。日本国内でも普遍文法の立場からの日英語対照文法の研究も盛んで、多くの研究書、論文が最近続々と生まれている。
- 4 例えば、屈折を持っていた古期英語では wif (=wife) は中性で、wifmann (=woman) は男性であり、また mōna (=moon) は男性で、sunne (=sun) は女性である。現代ドイツ語では、die Sonne (=the sun) は女性で、der Mond (=the moon) は男性、das Mädchen (the girl) は中性である。英語、ドイツ語のように祖を同じくするゲルマン語同志でもこんな状態であるから、印欧語に属する諸語の gender (文法的性) の区別はまさに支離滅裂である。
- 5 生成文法家で Bloomfield を批判する者は多いが、Chomsky, Fillmore らは Sapir は高く評価している。
- 6 例えば、H.J. Greenberg, *Universals of Language* (Cambridge, Mass.: MIT Press, 1966), B. Comrie, *Language Universals and Linguistic Typology* (Chicago: University of Chicago Press, 1981), J.A. Hawkins, *Word Order Universals* (New York: Academic Press, 1983) などを参照いただきたい。
- 7 Chomsky は Northeast Conference on the Teaching of Foreign Languages での講演でこのことを明言している。詳しくは後記文献2に参照されたい。
- 8 詳しくは、A.W. Cook, *Case Grammar: Development of the Matrix Model* (1970-1978) (Washington, D.C.: Georgetown University Press, 1979), 及び R. Dirven *et al.* (eds.) *Fillmore's Case Grammar A Reader* (Heidelberg: Julius Groos Verlag, 1987) などの文献一覧を参照されたい。

## 参 考 文 献

1. Anderson, John M. and Charles Jones, eds. *Historical Linguistics*. Amsterdam: North-Holland, 1974.
2. Chomsky, N. "Linguistic Theory," in Oller, J.W. Jr. and J.C. Richards (1969).
3. Dezso, L. (ed.) *Contrastive Studies—Hungarian-English*. Budapest: Akademiai, Kiado, 1982.
4. Fisiak, J. (ed.) *Theoretical Issues in Contrastive Linguistics*. Amsterdam: John Benjamin, 1980.
5. ———. (ed.) *Contrastive Linguistics, Trend in Linguistics Studies and Monographs* 22. Amsterdam: Mouton, 1980.
6. ———. (ed.) *Contrastive Linguistics and the Language Teacher*. Oxford: Pergamon, 1981.
7. Hawkins, J.A. *Word Order Universals*. New York: Academic Press, 1983.
8. Ishiguro, T. "A Descriptive-Comparative Study of English and Japanese Basic Statement Patterns," 1963.
9. 石黒昭博. 「日英両語の目的語構文の比較研究試論：対照文法の問題点」, 『主流』 No. 26 (1964).
10. ———. 「日英語対照研究と記号論的モデル」, 『表現研究』 No. 35 (1962).
11. James, Carl. *Contrastive Analysis*. London: Longman, 1980.
12. Jespersen, O. *The Philosophy of Grammar*. London: Geoge Allen & Unwin, 1924.
13. 喜多史郎. 『日英動詞比較論』東京：修光社, 1972.
14. Kleinjans, Everett. "A Descriptive-Comparative Study Predicting Interference for Japanese in Learning English Noun-Head Modification Patterns," 1956.
15. Krzeszowski, T.P. "Equivalence, Congruence and Deep Structure," in Nickel (1971).
16. ———. *Contrastive Generative Grammar*. Tübingen: Gunter Narr Verlag, 1979.
17. Kufner, H.L. *The Grammatical Structures of English and German*. Chicago: UCP, 1962.
18. 国広哲弥. 『日英語比較講座 第2巻「文法」』東京：大修館, 1980.
19. 久野 暉. 『日本文法研究』東京：大修館, 1973.

20. Kuroda, S-Y. "Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese," in Poser (1988).
21. Lado, Robert. *Linguistics across Culture*. Ann Arbor: Univ. of Michigan Press, 1957.
22. 牧野成一. 『くりかえしの文法：日・英語比較対照』東京：大修館，1980.
23. 巻下吉夫. 『日本語から見た英語表現』東京：研究社出版，1983.
24. 榊田秀郎，大野芳太郎. 『比較対照 日英文法綱要』東京：創文社，1934.
25. 松下大三郎. 『標準日本口語法』東京：中文館書店，1930.
26. 水谷信子. 『日英比較 話しことばの文法』東京：大修館，1985.
27. Nickel, G. (ed.) *Papers in Contrastive Linguistics*. London: Cambridge University Press, 1971.
28. Oller, J.W. Jr. and J.C. Richards. (eds.) *Focus on the learner: Pragmatic Perspectives for the Language Teacher*. Rowley: Newbury House, 1969.
29. 大槻文彦. 『広日本文典』私家版，1872.
30. Poser, W.J. (ed.) *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*. Menlo Park: CSLI, 1988.
31. 空西哲郎. 『英語・日本語』東京：紀国屋書店，1963.
32. Stephannides, E.H. (ed.) *Contrastive English with Hungarian*. Budapest: Akademiai Kiado, 1986.
33. Vennemann, Theo. "Topics, Subjects and Word Order: From SXV to SVX via TVS," in Anderson and Jones (1974), pp. 339-376.
34. 山田孝雄. 『日本文法学要論』東京：角川書店，1950.

1991. 4. 30 受理

**Synopsis**

## A Pedigree of Contrastive Grammar

Teruhiro Ishiguro

The history of the term “contrastive linguistics” does not go back to the olden days. It may be, say, in its first generation. Hundreds of studies have been done in these few decades, but most of them, I would say, were aimed at the pedagogical objectives, namely, to prepare materials for effective foreign language teaching. It was only in 1970s when generative theory became firmly based that the theory for contrastive linguistics was established in the field of the so-called theoretical or pure linguistics.

The publication of *Contrastive Linguistics*, a splendid collection of articles dealing with contrastive linguistics, compiled by Professor G. Nickel in 1971, was indeed a monumental event. For the first time in the history of linguistics, contrastive study was separated from the bondage of applied linguistics and established its independence.

In this paper, I have attempted to introduce a history and development of contrastive study from times of traditional grammar through structural and generative grammar.

It is observed that the history repeats itself in this field of linguistic study: consciously or unconsciously, linguists who attempted contrastive studies have described the two target languages from the viewpoints of either universalism or relativism. It is difficult to



decide which side mentioned above is more appropriate for the description of language. In the field of contrastive linguistics also, the repetitive game between these two linguistic concepts have struggled for generations and generations.

I introduced some aspects of this invisible conflicts between the two concepts giving specific examples taken out of representative literatures from the past and the present. My data are not restricted in Anglo-American sources; I used European and Japanese sources as well in order to broaden the perspective of the study. Especially the east-European materials by such linguists as Professors T.P. Krzeszowski and E.H. Stephannides were tremendously valuable and helpful for me to write this paper.

It is also a happy note that many young Japanese linguists in theoretical linguistics both at home and abroad have been seriously concerned with contrastive studies making uses of newly discovered linguistic data in their recent researches. It is remarkable that their numerous achievements have been published in the U.S., Europe and Japan and have accepted proper and high evaluations.

It is only regrettable that limitations of space have compelled me to simply deal with syntactic phases of contrastive analyses in this paper. It goes without saying that there have appeared dozens of superb studies in the fields of phonology and semantics.